

山車の修羅

能村 研三

大龍寺の子規の墓

白昼の砂冷えてをり蟻地獄

辻佐原祭に來てのの字に廻す山車の修羅

路地になほ路地ありて行く甚平翁

終曲の打楽器乱打夏行かす

ゆるく寄せゆるく巖打つ盆の波

書き出しの糸口探す夜の秋

立秋の一机一脚テレワーク

散る前の萩の湿りを知りてをり

橋詰めに括れる道や曼殊沙華

定家蔓咲き余りたる境垣

お盆の供養で菩提寺の谷中の延壽寺に詣でた帰り、田端の大龍寺にある正岡子規の墓を訪ねた。9月に松山の子規記念館で行われる講演を前に子規の遺徳を偲びたいと思ったからである。谷中から田端は電車に乗ると3駅あるが、車で行くとならずか3キロ位の位置にある。父登四郎も若い頃おそらくは田端の家から谷中の菩提寺までは歩くこともあったのだろう。旧道らしき道を走ったが、谷中銀座の裏手にあたるところなのか個人商店が並ぶ下町情緒溢れる道であった。田端の大龍寺には10年前位に吟行会で訪ねたことがあったが、近年になって二階建ての本堂が建つて以前の面影とは違っていた。本堂わきの墓地には、子規の墓をはじめ、宮廷音楽家のE・H・ハウス、陶芸家の板谷波山、柔道の横山作次郎などの著名人の墓もあった。子規は根岸で亡くなっているの

で、本堂なら谷中の寺に墓を設けるところであったが、「静かな寺に葬って欲しい」、「酔った花見客にステッキの先で墓石をつつかれるのは嫌だ」と生前佐藤紅緑にいい、死期が近くなつて弟子たちが田端の大龍寺を探し伊藤左千夫らが下見したと言われている。

墓は本堂の奥手の竹が茂っているあたりにあり、正面が子規の墓で、右には母親の八重、左には正岡氏累世(代々)の墓がある。

墓は大きくはないが、その隣には墓碑が建つていて碑文には松山藩士の子であることや、陸羯南の新聞「日本」から貰っていた月給が30円であったことまで書かれていている。竹ノ里人の号に因んで植えたのか、墓の後ろには竹が茂っている。

墓石の「子規居士之墓」の字は、陸羯南(子規が新聞記者として働いていた新聞「日本」の社主)の筆跡だそう。

子規の墓の墓参の後、根岸の子規庵を訪ねたが、閉館時間を過ぎていて入れなかったが、鶯谷の羽二重団子の本店に立ち寄った。

芋坂も団子も月のゆかりかな 子規

能村 研三